

別記様式第6

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (心理学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	山本 一希
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) トップダウンの自己身体認識がフルボディ錯覚に与える影響			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	中尾 敬	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	服巻 豊	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	関矢 寛史	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	難波 修史	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>「この身体はまさに自分の身体である」という感覚は身体所有感とよばれ、その生起要因はフルボディ錯覚といった身体錯覚現象を通して検討されてきた。フルボディ錯覚とは仮想現実内のアバターのような自分の身体ではない身体 (以下、仮想身体) が、自分の身体のように感じられる現象である。この現象は、仮想身体の背中をなでている映像 (視覚刺激) と同期して自分の身体の背中がなでられること (触覚刺激) で、これらのボトムアップの入力が統合されて生起するとされている。本研究は、仮想身体を自分の身体と捉えるか、他者の身体と捉えるか、といったトップダウンの身体認識が、フルボディ錯覚に与える影響について検討したものである。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、身体錯覚現象についての先行研究をレビューし、トップダウンの身体認識が身体錯覚現象に及ぼす影響が実証されていないという問題を指摘している。その上で、本研究の一つ目の目的は、仮想身体を自己の身体であると捉えるトップダウン認識が、フルボディ錯覚に影響することを明らかにすることであることが述べられている。</p> <p>また、自分自身の身体から自己が切り離されたかのような感覚 (離人感) を反復的に体験する離人症の先行研究において、離人感をもたらす自分の身体を否定的な対象としてトップダウンに認識することが離人症の慢性化をもたらすと考えられていること、そしてその実証には至っていないことを指摘している。離人感とは、自己の身体に身体所有感が感じられにくくなる状態であることも踏まえ、本研究の二つ目の目的を、身体所有感の検討のために取り上げられてきたフルボディ錯覚と離人症傾向との関連を検討することとしている。さらに、三つ目の目的として、仮想身体をトップダウンに否定的な症状を呈する自己の身体として認識することにより、フルボディ錯覚が認められなくなるのかについて検討することをあげている。</p> <p>第2章では、本研究におけるフルボディ錯覚の実験パラダイムと実験環境に適したフルボディ錯覚の指標の検証を行い、錯覚質問紙による主観指標と、皮膚電気反応による客観指標が有用であることを確認している。</p> <p>第3章では、トップダウンの認識を操作するための教示が、離人症傾向にかかわらず有効であることを確認している。</p>			

第4章では、本研究の一つ目の目的である、仮想身体を自己の身体であると捉えるトップダウン認識がフルボディ錯覚に与える影響、及び二つ目の目的である、フルボディ錯覚と離人症傾向との関連について検討している。その結果、仮想身体を自己の身体であると捉えるように教示した場合には、他者の身体であると捉えるように教示した場合に比べ、フルボディ錯覚が強く生起することを示し、フルボディ錯覚にはトップダウン認識が影響することを実証している。また、仮想身体を自己の身体であると認識させた場合にのみ、離人症傾向が高い人ほどフルボディ錯覚が生起しにくくなるという関係も明らかにしている。

第5章では、三つ目の目的である、仮想身体をトップダウンに否定的な症状を呈する自己の身体として認識することにより、フルボディ錯覚が認められなくなるのかについて検討している。その結果、第4章と同様に仮想身体を自己身体と捉えるように教示した場合にはフルボディ錯覚が生じたものの、仮想身体が腹痛状態という否定的な症状を呈する自己の身体と捉えるように教示した場合には、フルボディ錯覚が生じなかったことを報告している。

第6章では、本研究の成果として、トップダウンによる自己身体認識がフルボディ錯覚に影響すること、その錯覚生起量は離人症傾向が高いほど小さくなること、仮想身体を否定的な症状を呈する自己身体と認識させる操作を行うとフルボディ錯覚が生起しにくくなること、の三点を示したことがあげられている。残されている今後の研究課題として、仮想身体を否定的な症状を呈する自己身体と認識させるという操作がフルボディ錯覚の生起を阻害した背景には、否定的に認識することそのものではなく、仮想身体について想定させた腹痛状態と、実際の自己の身体状態とのずれが、フルボディ錯覚の生起を阻害した可能性が残されていることなどがあげられている。

本論文は、次の三点で高く評価できる。

1. 第2章において有用なフルボディ錯覚の指標の確認を行い、第3章においてトップダウンの認識を操作するための教示が離人症傾向にかかわらず有効であることを確認するなど、用いる方法の検証から丁寧に行うことにより、信頼性の高いデータの収集を可能にしている。
2. 従来の身体錯覚現象の研究においてもトップダウンの認識が影響する可能性については示唆されていたものの、それらの研究ではトップダウン認識の操作方法に問題があり、ボトムアップの要因との交絡の可能性が排除できていなかった。本研究ではボトムアップ要因の操作とは独立に、教示によりトップダウンの認識を操作することで、その交絡の問題を回避し、トップダウンの認識がフルボディ錯覚に影響することを実証している。
3. これまで各々の研究領域で検討されてきたフルボディ錯覚と離人症の研究を結びつけることで、フルボディ錯覚におけるトップダウン認識の影響と、離人症に関係があることを明らかにしている。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和6年 2月 8日

備考 要旨は、A4版2枚（1,500字程度）以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed A4 size, 2 pages (about 500 words).)